

# 永遠の今

長野県音楽教育学会会長 杉山由一



大きな感動とともに全日音研長野大会が終了し、平成25年度が新たにスタートしました。県外からも多くの先生方が長野に集まり、大きな盛り上がりを見せたこの大会の成果が、一時の、一部の人のだけのものではなく、長野県全体に広がり、深まっていくために、今後に残された課題は大きいと考えています。大会を振り返ると、子どもたちの楽しそうな笑顔がたくさん浮かんできます。きっと参加した子どもたちにとっても、忘れられない思い出となったことでしょう。

皆さんは小学校・中学校時代で、何が心に残っているのでしょうか。たくさんあったはずの時間の中で、その一コマが鮮明に心に残っているということがあります。その人の生涯に大きな意味を持つ、大切な一瞬に、私たち教師は大きくかかわっています。私はこの瞬間を、「永遠の今」として大切に考えています。

ある中学校に、校内合唱コンクールの審査員として招かれました。その中で、3年生のあるクラスの歌がとても上手で感動しました。そしてそのクラスは、歌い終わって席に着く中で、何人かの人が泣いていて、歌に対する思いの深さ、やり遂げた充実感があったのだと、その時は思いました。私は審査で迷わずに金賞に決めたのですが、そのクラスは、3年で初めて金賞をもらったと聞いてびっくりしました。学級編制がなく、1年生からずっと同じクラスなのに、それまで金賞が取れなかったなんて、どういうことなんだろうと思って聞いてみたら、音楽の先生がこんな話をしてくれました。

そのクラスには、特別支援学級に在籍するA君がいました。A君は原学級でも友だちと仲良く生活でき、周りの仲間もしっかりと支えていました。でも一人で全く違う音を歌うので、ハーモニーもこわれてしまうし、合唱をつくることができません。毎時間の音楽の授業でも、そのクラスは、自分たちが作る合唱のハーモニーの美しさというものを、感じたことがなかったのです。学習指導要領の音楽科の教科目標の中に、音楽に対する感性を豊かにし、豊かな響きを感じ取ることが示されています。音楽の先生は、一度だけ最後の音楽会ではこのクラスに、自分たちの合唱の響きを感じさせたいと考えて、そのA君に、「あなただけにしかできない特別な役があるんだけど、やってくれないかなあ」と持ち掛け、譜めくりをやってもらったのです。A君は喜んで、一生懸命伴奏者の楽譜のめくり方や、めくる場所などを考え、彼なりに頑張ったそうです。そして音楽会ではいいハーモニーで発表できたのです。

私はこの話を聞いて、あの時の涙の意味がわかったような気がしました。子どもたちは全て納得していたわけではないのです。A君も大切な学級の一人の仲間として、2年間大切に生きてきて、それで金賞が取れないのなら仕方ないと思っていたのです。この形で発表すると決めるまでに、たくさん話し合いや意見の衝突があったに違いありません。だから歌い終わっても、「私たちの歌は本当にこれでよかったのだろうか」と、心の中に葛藤があったのです。

「それは差別だ」と憤る人もいるでしょう。「いやA君にもちゃんと納得できるように説明している。音楽の指導からいえば、こういうこともありうる」という考え方もあるでしょう。日々の教育活動の中では、一つの見方では決められないことがたくさんあり、私たちは判断に迷います。しかし、確かなことは、この中学校の子どもたちは、一生この時の合唱を忘れないだろうということです。この葛藤が、一人一人の人格形成に大きな意味を持つ、まさに「永遠の今」だと思うのです。

子どもたちと音楽の活動をする中で、こうした瞬間がたくさんあるといいなと思います。見逃さず、大切に、時には意図的に教育活動の中に位置付けていくようにできたら素晴らしいですね。

教師としての自分のスタンスがしっかりと持てるようになるために、自分を高めていこうとする研修は、子どもを教え導いていく上で、欠くことのできないことです。そこに大きく関わり、学び合い、高め合うことのできる音楽教育学会でありたいと思っています。一年間よろしくお祈りします。